

## 台風の日

日本IERE会議議長  
東京大学名誉教授

関根 泰次

Yasuji Sekine, Dr.  
Chairman, JAPAN IERE COUNCIL  
Professor Emeritus of The University of Tokyo

世界の電力研究をみても、人の面でも資金の面でも現在わが国はフランスと並んで文字通り世界の牽引車になっている。

一方、世界の電気事業をとりまく環境は、今めまぐるしく動いている。わが国でも発電部門に対する市場開放が進められつつあるが、ヨーロッパやアメリカでは一足先にこれが実施に移されて、会社の分割、合併、さらには人員削減を含む企業の合理化が凄まじい勢いで進んでいる。殊に発電部門、配電部門においてその傾向が著しい。海外出張するたびにそれを目にする、その凄まじさに驚かされ、却って行き過ぎて将来に禍根を残すのではないかと思われるくらいである。そんな情勢の中で日本をみても、日本はいわば台風の日の中にある気さえしてくる。「台風の日」というのは通常それが中心になり、起動力になって周囲を巻き込む力の源という意味であるが、ここでいう台風の日は、台風の渦の中にばかり生じた無風地帯という意味である。

このような事業環境は、とりも直さず電気事業における研究開発にも影響を与えずにはおかない。どこへ行っても長期的視点にたった研究がしにくくなり、資金や人材等の研究資源はより短期的に企業に利益をもたらす問題につき込まれ、10年、20年かかるという研究題目は疎遠にされがちである。研究所を企業から切り離して、独立採算制をとらせ研究に要する費用を親会社だけでなく、世界の電気事業から調達させる動きも出ている。いわば研究を請け負い仕事と見ているわけである。

研究というのは本来、未来に対する投資であり、今日の事業を運営するための経費ではない（実際に今日、明日の短い時間のうちに解決をせまられている問題ももちろん存在するが…）。発電ひとつにしても現在のことだけ考えれば、必ずしも原子力に頼る必要はない。全面的に安い石炭や石油に頼ることも可能である。しかし、電気エネルギーは我々の子孫の生存のために



なくてはならないものであり、原子力技術についての今日的な問題もちろんあるが、その大部分は我々の子孫のための先行投資である。1年や2年の視点で論ずべきではない。このことは理性的に考えれば分かりきったことであるが、世の中は必ずしも理性だけで動くわけではなく、海外の動向はこれとは反対の方向に動いているようにみえて仕方がない。

研究はまた、夢を追うという人間本来の欲求に基づいている面もある。現時点あるいは予期される近い将来に、kW、kWhという観点からエネルギー供給に寄与しないからといって、それだけで研究を行わないというのも研究の本質から外れている。人類の夢に貢献するものであり且つそういう夢を抱く人がいる限り、それだけで研究を行う価値があるように思う。太陽エネルギーや超電導などはその例であるといったら、これらの技術の開発に携わっている人から叱られるであろうか。

このように考えると、我々の第一の問題は、個々の研究が短期的期間の間に効果が期待できることを目指したものなのか、我々の将来に対する投資なのか、夢の実現なのかについての認識が、きちんと成り立っているかどうかということであり、第二にその認識の上になって、人、金、時間の研究資源が合理的に配分されてるか否かであり、第三にそのための方法論が確立されているかである。

世界における電力研究が、前述のように極めて近視眼的になっており、このため将来に禍根を残すかもしれない状態にあるとき、世界の電力研究の牽引車の役割を果たしている日本が、真の意味での「台風の日」となって電力研究を正道に戻し、研究開発によって世界とその将来に貢献することは、日本のとるべき道のように思われるが、いかがであろうか。殊に日本が長い歴史の中で諸外国の研究開発の恩恵を受けてきたことを考えるとき、この感を深くする。